

第4回社会教育委員会議概要

- 開催日時 令和8年2月5日(木)13時30分～16時30分
- 開催場所 舞鶴市役所 本館4階 議員協議会室
- 出席委員 福原委員、谷口委員、阿部委員、鈴木委員(リモート)、田中委員、吉岡委員、渡辺委員 計7名
- 欠席委員 江上委員、波多野委員
- 事務局等 福田部長、森次長、森野係長、山本、仲嶋
- 傍聴者 なし

1. 開会

〈福原会長 挨拶〉

城北中学に招かれて高校受験の面接練習の面接官役をした。学校内だけでは真剣さが足りないとのことで、地域の方々とすることになった。練習とはいえ子どもたちは緊張していたが、よい機会だった。学校と地域との連携も必要だと思う。

2. 報告事項

(1) 京都府社会教育研究大会について

→事務局より説明

〈福原会長〉

防災についての話を聞かせていただいた。昨年の中丹地区の研修会においても能登半島の地震に絡めたテーマであり、この頃、社会教育で防災について話が出てくるようになってきた。防災にまで踏み込むと社会教育が丸抱えになって難しくなるので、社会教育委員としてどのように関わっていくのかを考えなければならない。

(2) 舞鶴市二十歳のつどいについて

→事務局より説明

〈福原会長〉

降雪に見舞われ心配したが無事に終わりホッとした。今は多くの方々が市外に出ているが、今後舞鶴に戻ってきて活躍してほしい。

(3) 中丹地区社会教育委員連絡協議会研修会について

→事務局から説明

〈渡辺委員〉

地域と学校が繋がるためにはコーディネーターが必要だということを実感した。

〈阿部委員〉

地域と学校という言葉がよく出てくるので、地域の中で公民館が事業を実施するのが基本だと思うが、学校をキーワードに新しい課題について取り組む必要があると感じた。

〈谷口副会長〉

地域の社会教育として新しく取り組むのではなく、元々持っている能力を活用していく、知見が役に立つという部分は理解できた。綾部市、福知山市の社会教育委員のあり方などに違いがあり、意見交換ができたのは良かった。

3. 事例発表（渡辺委員）「学校と地域連携」

教員時代の学校と地域連携についての話が中心の発表になる。

西舞鶴高校を卒業後、大学に進学した。小学校からバレーボールをしていたが、大学では部活に入らずに西舞鶴高校の部活に関わっていた。大学卒業後、愛知県で教員をしていた。生きて働く学校教育について議論しており、とても進んでいた。再度試験を受けて京都で教諭をした。ほぼ東舞鶴の学校に配属だったが、支援学校に務めていたこともあった。障害に応じた教材を使って良いという決まりがあり、それぞれの子どもに合った教材を作っていた。退職後は市の教育委員会に入り、5年間だったがいろいろなことを学んだ。52歳でスポーツ協会に入った。

26歳の時（昭和50年）に舞鶴に帰ってきた頃は、全国的に教師への反発や反抗が多かった。舞鶴では全国で初めて逮捕者が出た。平成23年頃に周りの中学校が落ち着いてきたが、青葉中ともう一つの学校がなかなか落ち着かなかった。当時の青葉中に向けての地域の評判は良くなく、地域からの評判を子どもたちも感じ取っていた。中丹地区の校長会で、「地域の力を借りて学校を変える」という綾部市の校長先生の言葉を思い出し、南舞鶴福祉協議会へ協力依頼をした。「南舞鶴を良くしよう、学校、保護者、地域で子どもたちを育てたい」と地域に訴えかけると、青葉中学校地域支援協議会が46名で発足。授業を受けていない子どももいたが、一生懸命勉強している子どもも99%くらいいた。そういう生徒にも目を向けてほしい。8月に総会を行い、年に3回プランターに花を植えるなどの校内整備、あいさつ運動を行うことが決まった。挨拶運動は朝8時半から8時45分までで、8～10人集まった。今まで挨拶をしなかった子どもも、少しずつ挨拶をするようになった。あいさつ運動の後、協議会の部屋で意見交換をする時間を設けた。学校給食が始まった頃だったので、有料だけれども学校給食を食べてもらった。

学校側から地域への取組については3点あり、1つ目は東舞鶴公園の清掃活動をサッカー、野球、ソフトテニスの部員が行うこと。2つ目は75歳以上の一人住まいの方々に手紙を配るお便り作戦をした。年末年始を話題にとっても喜んでくれた。子どもたちにお菓子をくれる方もいた。「手紙でこんなに喜んでもらえると思わなかった」という子どもが多かった。3つ目は合同防災訓練を行った。青葉中は4階建てなので、4階か大宮方面に逃げたら良いが、幼稚園児や小学生の避難に不安を感じていた。釜石の奇跡を思い浮かべて、その時の中学3年生と幼稚園や保育園と合同防災訓練を実施した。2時間ほど時間を取ってやった。当時、むくれている子どもを心配したが、幼稚園児が話したりしてスキンシップを求め続けると、むくれていた子どもも自分の膝に園児を座らせたりしていた。子どもたちが当てにしてもらえる心地よさを感じるきっかけになった。新聞にも取り上げていただいた。この3点は頑張っただけよかった。ただ、自分が赴任する前から、南のふれあいサンデーに参加したり、除雪や川の清掃をしていた。

こうした活動の結果、地域の人達の反応が変わった。地域の方に子どもの頑張りもわかってもらえるようになった。「おかえり」といった声が聞こえたり、怖い、とっつきにくいなどという印象が変わった。

（事例発表に対する質疑）

〈吉岡委員〉

すごく印象に残ったのが、当てにされる心地よさという言葉。幼稚園の子どもを避難させるという活動は、当てにされるという経験に繋がる。社会に出てもその経験が繋がっていく。ありがたいと言われるから頑張れるところがあると思う。

〈鈴木委員〉

いつもみなさんのお話を楽しみに聞かせていただいている。人と人が直接的に接点を持つことの意義を感じた。大学生の論文を見ているとAIが普及しているので、人と会わなくても文章がかけるようになってきているが、原点となるのは人と人とのふれあいが大切だと思う。それを社会教育の中でどのように取り入れていけるのが課題。

<田中委員>

保護者と地域と先生との連携というお話だったが、先生の熱い気持ちが生徒を変えていった。あいさつ運動のあとに話を作る時間を作ったことも上手く言った要因ではないか。

<阿部委員>

城北中も青葉中と同じ取り組みを行っていた。地域、学校、保護者が三位一体となり、子どもを真ん中に置くことが大事。地域というのは学校に対して無関心だった。関わっていただけがないという状況がある中で、子どもたちが学校でも地域でも好き勝手していた。ちょっと声を掛けるだけで子どもはすぐに変わると思う。この時の職員はタフだったと思う。メンタルダウンして職場を辞める職員が少なかった。昔の先生は髪の毛を振り乱して生徒と向き合っていた印象がある。

<谷口副会長>

想像しやすいお話だった。別の視点からお話を聞きたい。教員とのチームプレーで工夫したことは何か。また、自分が離れた時に上手に次へ受け継ぐ方法を聞きたい。

<渡辺委員>

当時6クラスで300人近くの生徒がいた。先生たちは困難校であるがゆえにみんなでまとまったような感じがあった。待っているだけではだめなので、自分から関わっていこうと思った。当時の学校の考えは何かあったら排除する考えだったので、1年目は待つことしかできなかった。2年目からもっと子どもたちと寄り添う取り組みを議論し始めた。最初は冬休みに親と子どもと話をし、3学期からの方向性を話し、まず子どもたちと触れ合おうとした。自分のあとの校長は自分もよく知っている校長だったので、次の校長がレベルアップさせて取り組んでいた。その次の校長からはプランターや地域の方に入ってもらうというのはなくなっているが、あいさつ運動は続いている。

<福原会長>

これまで学校と地域と一緒に何かをするということがなかった。谷口副会長がされている「おでかけひまわり」という活動で、中学校に入って子どもとふれあうというのは良い効果だと思う。しかし、地域や学校活動の機運が下がっていたり、PTA活動が任意であるという課題がある中で、組織をしっかりとしないと自治会などの活動が低迷してしまうのではないかと。学校と地域、家庭が連携することが大切だと思う。

4. 協議内容

・公民館職員に求められるスキルの意見書について

→事務局より説明。

<阿部委員>

きっちりまとめていただいているので、内容はこれで良い。これをどう伝えたら

よいのか、作って終わりにならないようにするにはどうするか。公民館で最近気になっているのは、館長が変わっていく中で、どのようなつなぎ方をするのかということ。公民館長と話していても、その館長が異動になってしまい、当時の館長と企画していた事業が頓挫したことがあった。そのことから、館長の異動時のつなぎ方が気になった。

意見書の中に「学校の職員が館長」と書いてあるが、館長ではなくても職員として学校教員経験者がいればよいのかと思う。地域の中、社会の中の課題解決という視点はとても大切。公民館で様々な楽しい行事をしているが、地域の課題解決になっているかという点と違ってくると思う。高齢者だけの取り組みであれば、高齢者だけがターゲットになっていくが、課題解決であればいろいろな世代がターゲットになるので、地域課題解決の視点を持つことが大切。

<田中委員>

よくまとまっている。市民から見て「こんな公民館職員がいたらよいな」という視点があってよいと思う。具体的に表現された意見書になっていると思う。大きく変えるところはない。「机に向かって～」という箇所も攻めている表現だと思った。

<鈴木委員>

2つある。1つ目がこの意見書をどう伝えるのか。2つ目は社会教育という入口から入っていない方をどう取り巻いていくのか。社会教育士を取得することで、立場は違えど共通言語が出来ることが大きい。つなぐ、役所の職員でありつつ資格を取ったりしている中で、次の先のビジョンにつながるように、大きなネットワークを元につなぐことが大事だと思った。

<吉岡委員>

まとまっていて、2年間してきたことが凝縮されている。多世代が集える場というのを高校生たちがどれだけ経験できるかが大事になっている。多世代が利用しているけれども使用する時間軸がずれるのではなくて、みんなが集える場所にしていくにはどうしたらよいか。見え消しの部分は、すでにわかっていることもあえて書いておいてもよいと思う。

<渡辺委員>

5ページの5番の「公民館の基本的な機能として」という箇所について、これはこれで良いと思うが、これからいろいろな体験を入れていくことが大事なので、公民館長に期待したい。

<谷口副会長>

意見書の見え消しの部分について、吉岡委員はあえて見せていくという意見だが、私は消して良いと思う。この意見書のバランスを見た時に、見え消しを入れてしまうとときつく見えて尖った印象になってしまうのではないか。その他の部分でも、なかなか尖っている表現があるので、見え消しの部分くらいは消しても良いと思う。学校関係者について踏み込んで書いているのもこの意見書の特徴だと思う。個人的に様々な活動をしていて、阿部委員が言うから納得するし、阿部委員が公民館にいてくれたら安心するが、公民館のユーザーとしての意見は、校長先生だった方が必ずしもみんな自分たちの活動を助けてくれた訳ではない。人として出会う場として、「学校関係者」という文言が意見書に残っていく時に独り歩きしないかが疑問に思う。引き継がれて行くときに、学校関係者なら誰でも良いと思われたいよ

うにしないといけないと思う。

<福原会長>

議論のポイントとして、見え消しについて消してよいか、退職校長という表現について、概要版はこれで良いのかという3点について議論していきたい。事務局としてこの意見書をどのように伝えていくのかも知りたい。

<森次長（事務局）>

これまでは、社会教育委員会議からの建議書や意見書を受け取っただけの形になっていたので、市としてどう取り組んでいくのかを示していかなければならないと考えている。属人化せず一般化しないといけない。今後、どう取り組んでいくかについては、館長とも話し合っていていく。

<福原会長>

市長には人材育成を希望する。見え消しの部分は消して良い。退職校長という言葉はクローズアップされる可能性があるので、学校関係者などの柔らかい言葉が良いのではないかと。概要版は多少見えにくいところはあるが、これで良いと思う。

<阿部委員>

「例えば」という文言が入っているので柔らかくなっているのではないかと思う。退職校長が必要とする公民館とそうでない公民館があると思う。公民館によっては学校に積極的に入り込んでいこうとする館長がいる。その時に学校の敷居が高くてなかなか入りにくいという意見があるので、そういう時に教員がいると最初から腹を割って話せると思うし、ハードルが下がると思う。ただ、全ての公民館に当てはまるわけではないので、必要であればということで良い。

<田中委員>

令和8年度の秋から中学校のクラブ活動が地域に展開されるとのことで、文化協会も文化の面で部活に協力する人を集めているところ。そのことから、公民館でクラブ活動をすることもあるので、子どもたちの技術的な部分ではなく気持ち的な部分で寄り添ってもらえそうという点から、公民館に学校経験者がいると安心だと思う。子どもたちへのいろいろな問題があるので、学校経験者がいると心強いと思う。11ページの部分は具体的な方が良いと思う。

<吉岡委員>

見え消しはあってもなくても良いと思うので、きついと思うのであれば消して良いと思う。公民館と学校をつなぐ人材として、学校の職員がいればよいのではないかと。全く消していくのではなくて、教員がいるメリットを入れた表現にすれば良いのではないかと思う。

<渡辺委員>

あえて学校という言葉を出さなくても良いと思う。学校関係者がいてもいなくてもよいと思う。必要な時にたまたまいた、というくらいでよいのではないかと。

<鈴木委員>

行政文書の側面からいくと、「退職校長」などというように1箇所だけ具体的だとそこに注目が集まってしまう。例えば、地域クラブ活動はどこでも悩んでいる案件だと思うので、そういった具体的な例を挟みながら間接的に学校と公民館の関係性

を伝えるのが良いのではないか。

<谷口副会長>

退職校長や学校関係者、学校経験者が館長ではなく、職員になるならよいのではないか。綾部市での研修で地域の中の社会教育の人、という言葉を出した時に、学校教育で経験した知見を地域で社会教育として発揮するという話だった。公民館は学校教育の場ではないのに、学校という言葉を入れると学校に引っ張られてしまうと思う。学校の経験を持った方が職員の知見として発揮していくということではよいのではないか。

<福原会長>

「教職員経験者」を「学校関係者」に変えて残す。「例えば」を「必要であれば」という言い回しに変えるなど工夫するのはどうか。

<渡辺委員>

学校の先生は、その専門性や学校内の活動に特化する傾向があるため、社会情勢や地域課題に関する知見が十分でない人もいるので、あえて学校教員を入れる必要はないと思う。ただ、教員の中にもいろいろな経験をされている方がいるので、たまたま社会教育に通じる経験がある人もいるが、たまたま学校経験者だったというくらいでいいのではないか。

<吉岡委員>

学校の先生でも6つの項目に長けている先生と、そうでない先生がいる。それはどの業界でも同じだと思う。ただ、これからの学校の先生も社会教育的な側面があってほしいので、上手く表現を変えて残してもよいのではないか。

<阿部委員>

11ページの部分は経営に関わる視点が多いが、地域の課題解決という視点で教職員経験者がいればいいという表現があってもいい。「必要に応じて教職員経験者を職員とすることで、一定地域の活性・課題解決に繋がるだろうという意見もありました」ような表現で書いていただくとよい。

<森次長（事務局）>

11ページ2段目後半の「公民館に正職員を配置することは極めて有効であると考えています。」から続くようにして、「しかし、すぐに全公民館に～現状を鑑み、」の後ろに「地域のことをよく知っており、地域の団体との繋がりを一定築かれている方を職員とするのが望ましい」としてはどうか。

<渡辺委員>

大事なのは素質なので、それで良いと思う。

<福原会長>

他に意見がなければ、このとおりで修正する。

<森次長（事務局）>

見え消しについては、削除するかどうするか、全体を見て考える。

<福原会長>

概要版の訂正はあるか。

<森次長（事務局）>

→概要版の追加説明

<谷口副会長>

意見書にない言葉だけど、概要版にしか現れていない言葉がある。

<森次長（事務局）>

そのとおりなので、意見書の6ページの中に概要版の言葉を入れるよう考える。

<福原会長>

概要版なので、意見書に出てきていない言葉が出るのは良くないと思う。

<森次長（事務局）>

6ページの（2）の最後に次の6つのうち、「1～3について」「4～6について」というように一言入れるのはどうか。

<谷口副会長>

概要版にある言葉と揃えた方が良い。

<福原会長>

概要版で「基盤構築フェーズ」という言葉も初めて出てきている。

<森次長（事務局）>

6ページの①の前に「基本構築フェーズ」を入れて①②③の文章を並べ、8ページの④の前で「実践展開フェーズ」という一言を入れて④⑤⑥の文章を並べるのはどうか。

<鈴木委員>

基本的には元の文章があって、それがまとまったのが概要版。個人が実行する前に2つをつなぐ「学び合い」という言葉が入るのではないか。

<森次長（事務局）>

6つのスキルの話は初期から話をしていて、①～③が基礎、④～⑥応用というイメージを持っていた。それをどのような図表で示したらよいのか悩みながらこの形にした。

<谷口副会長>

「基盤構築フェーズ」の「フェーズ」を取るとなった場合、この2つをどうまとめるのか、という話になる。並列で表現をしているが、矢印は左から右に向かっていくのか。

<吉岡委員>

2階にいても1階に降りていくこともある、という意味も込めて、2階建ての構造にしたらよいのではないか。

<鈴木委員>

表の作り方は人によって考え方が違うので、一方通行なのか、くるくる回る円の形なのかなど、2つをどのように並べるのかを話し合った方が良い。私は回るようにしたほうが良いと思う。

<吉岡委員>

文科省から出てきた2階建ての図があるので参考にしてみようか。

<森次長（事務局）>

フェーズを段階と修正するのはどうか？

<森次長（事務局）>

2階建てで修正してみる。

<福原会長>

フェーズを段階に修正し、本文にも反映させる。修正後、最新版を各委員に送るので確認願う。また、意見書の市長報告には、福原会長、谷口副会長、江上委員が出席する。

5. その他

・次回会議について

日時：令和8年2月13日（金）15時～16時

場所：舞鶴市役所別館4階413会議室

内容：教育委員との意見交換会

6. 閉会